

Title	ミルトンと背教者：『失樂園』のアブディエルをめぐって
Sub Title	On Abdiel in Milton's Paradise Lost
Author	広本, 勝也(Hiromoto, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1979
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.38, (1979. 2) ,p.38- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00380001-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミルトンと背教者

——『失樂園』のアブディエルをめぐる——

広 本 勝 也

一六四九年一月、チャールズ一世の裁判と処刑によって内政改革の革命的高揚は最高潮に達するが、同時に迷信じみた国王崇拜は国民感情において根深く、リベラルな長老派は次第に急進的な政治潮流から後退していく。ミルトンは大衆の信念の動揺を押え、弑逆と共和制を正当化するために直ちに筆を執り、『国王・為政者在任論』(*The Tenure of Kings and Magistrates*, 1644)を著す。この中で彼がプロテスタンティズムの原則に依拠しつつ、自由は「両刃の剣」であり、放縱なる者(無節操なリベラル派)は自分の夢の奴隷状態の中でそれを用いることによって、自分自身や他人に危害を及ぼすことになる、という意味のことを述べているのは、自由についての彼の考え方を知る上で興味深い。

ミルトンはこの論文によってその論争的な技量を認められ、三月には、新政府の国务会議から外国語秘書官の職務に任命される。公式文書の翻訳や国王派の攻撃に反論することが彼の主な仕事となり、このため当初計画していた英雄叙事詩のほうは棚上げになつてしまふ。しかし、ある意味では不毛とも思えるようなこうした情宣活動や権力闘争は、実はミルトンにとって余技的でもなければ付随的でもなく、すぐれて芸術行為と等価な本質的活動だったのである。

少なくともミルトンに関しては、詩作が無償の行為であるなどと語るべきではない。願わしくは夢であつてほしいと思われたに違い

ない王政復古前後の邪惡な社会において「少数ではあるが、ふさわしい聴き手」(VII. 31)を見出すべく、彼が心血を注いだ『失樂園』(Paradise Lost, 1667)は、一六四〇年代五〇年代の歴史の動向を決定する主体として、自国の政治過程に介入した行動的で戦闘的な知識人の内奥のドラマを伝達する手段としての意義を多分に持つている。もちろんミルトンが、イギリス革命の嵐に遭遇した自己の歴史的实践と日常闘争をこの叙事詩の中に政治的ドキュメントとして定着したというのではない。政治のみならず、宗教、文学、音楽、科学、歴史などすべての知識・思想をば大宇宙を飛翔する想像力のもとに集大成するのが叙事詩であり、ミルトンはかかる百科全書的な該博な知識を縦横に駆使して聖書の神話を築き上げたのである。だが、古代ギリシア・ローマの偉大な叙事詩がそうであるように、ある一面においては『失樂園』もまたルポルターージュあるいは新聞記事的な論説としての性格を有しており、イギリス革命を通じて培われた詩人の豊かな精神的土壌がそこに神話として対象化されていることを黙過するわけにはいかないのだ。

ミルトンは専制君主チャールズの惡政に対する抵抗が国民の權利であるよりもむしろ義務であると考え、未完の叙事詩と自分の衰えていく視力を犠牲にして、時には生命の危険にもさらされながら、理性が要求する政治的宗教的自由の領域を拡大するための戦いに携った。しかし、彼は無原則的な自由を主張したわけではなく、民主主義の推進者であつたわけでもない。彼は恣意性を意味するような自由には真つ向から反対し、階層的秩序を無視する平等化思想を強く否定しているのである。このような詩人の思想的立場と革命家像を最も明確に伝えていると思われるのは、『失樂園』第五卷五七行から第六卷五行までに叙されている次のような寓話であらう。

1 寓話の中の英雄主義

「天の大いなる年がもたらす日」に、神はすべての天使群を召集し、「わが独り子と呼ぶ者」を生んだこと、そして彼を天使長の地位に就任させたことを告げる (V. 603-6)。

今まで大天使の主だった者のひとりであつたセイタンは、新参の神の子が「救世の王」と呼ばれ、聖油を注がれて首座に就いたことに嫉妬し、「傲慢のためにその光景を見るに耐えず、己れを損われた」と思い込む。そして深夜、副心の部下ビエルゼバブに命じて、

全天使群のうち自分たちが指揮する三分の一の天使たちを呼び集め、神の命令であると欺いて、「会衆の山」と呼ぶ小高い山の頂上で会議を開く。ここでセイタンは、天使は皆、自由を有しており、等しく自由なはずの天の民が、神だけではなく、神の子にまでも仕えるというのは、自由と平等という基本的な存在条件に対する許し難い侵害である、と訴える(734)。要するにセイタンの主張は、神の子の摂政は専制政治であるというものである。彼は地位の格下げによる嫉妬をほかの天使たちの心の中にもかき立て、ことば巧みに彼らを扇動し、「暴政」に対する戦いを呼びかける。

この中であつてアブディエル(Abdiel)というひとりの天使だけは、セイタンの詭弁を「冒瀆の、虚偽の、傲慢なる論議」(809)とそしり、造物主である神の決定を悪しきまにいう権利がセイタンにはいささかもないことを断言する。そして神の子が天使長になつたのは、神たる者が自ら位を落として天使の仲間になつたのであり、それによつて天使らの名譽と幸福が増すのだ、神の子は王者にふさわしい完璧な美德を備えた英雄であり、その摂政は専制政治ではなく、価値と英知のヒエラルキーに基づく正しい政治体制である、と反論する。

だが、彼の熱誠にもかかわらず、誰もそのことを支持する者はなく、逆に「季節はずれ、奇異、軽率」(850-1)と非難される。そこで彼は、善悪の判断力を失くした背教者たちの嘲笑を受け流し、神の裁きを信じて、彼らの悪しき「会衆の山」を去る。

やがてアブディエルが神の幕屋に戻ったとき、神は四面楚歌のなかで反逆に同調することなく、「神の大義」を貫いた彼の沈勇と忍耐をほめ称える。「神の僕よ、より善き戦いをよく戦った。謀叛の大軍に立ち向かい、武力における彼らよりもことばにおいて強く、ただひとり、真理の大義を守り通した。そして真理を証すために、暴力よりもはるかに耐え難い世間の謗りによく耐えた。これは世の人々皆がお前を頌迷だといったとしても、神の前に嘉せられることが、お前の配慮のすべてだったからだ」(VI:29-37)と。

——以上のようなアブディエルをめぐる寓話から三つの問いが引き出されるであろう。第一には、真の英雄の性格規定にかかわつて、英雄的なのは神に対して反逆したセイタンか、それともセイタンに対して反逆したアブディエルかということが問題となる。第二

に、セイタンの語る「自由と平等」についてミルトンはいかなる評価を与えているのか、第三に、イギリス革命とミルトンの関係はどのように構成されていたのか、が問われなければならない。

まず第一点に関しては、神の王国における秩序と現世的現実における秩序はまさしく逆の関係にある、ということがいえよう。セイタンは神の教義を棄てることが正義の実現であると言い張り、神の秩序を否定して自分を新たな支配者とする社会体制を確立しようとする。彼の反逆は、世俗的価値意識に基づいて神の秩序を現世的秩序に転倒させようとする野心——現実に着した自己の欲望を表現するものではない。

一方、アブディエルは、セイタンが治める現実のコミュニティから疎外されることを恐れないで、自分の心の中の秩序に従って行動する。彼は神の秩序を否定する者を否定し、最終的な価値の源泉であるところの神につながろうとしており、現実の共同社会からの迫害や嘲笑を恐れない雅量をもっている。英雄とは、神の教えに見出したところの自己同一性をば究極的な倫理的基盤として、それによって自己の意識と行動のすべてを規制する者の謂にほかならない。そうすることによって彼は、いかなる迫害や屈辱にも耐え得る雅量——『復樂園』(*Paradise Regained*, 1671)のキリストのことばでいえば“magnanimous”(II. 483)な心をもつことができるのだ。

セイタンがかかる理念に殉じる意味での強靱な精神も *magnanimity* も持たないのに対して、神の教義というイデオロギーに支えられたアブディエルは、神が称賛したように武器における反乱軍よりもことばにおいてはるかに強力である。それ故に彼は自己を円満する否定的な現実の中で多数者(大衆)の意見に同調することなく、忍耐と英雄的殉教の「よりすぐれた勇氣」(“better fortitude,” *Pl. IX. 31-2*)を示すことができたのである。

以上のことを神の目から見れば、革命は反革命であり、heroはfoolであり、「季節はずれ」が英雄的で、玩迷が戦闘的であるということになる。換言すれば、怯懦と見えるアブディエルこそ真の英雄主義を体現している、といえよう。

2 神の秩序としての自由

Eyre が指摘しているように、キリストは、いわば天国における禁断の木の実であり、「天使たちの服従の試練と彼らの精神教育の一環として眼前に意図的に提出された挑発的な対象」⁽²⁾であった。セイトンはこのような神の意図を洞察できなかったという意味で深慮に欠けている。彼は自分よりも優位にある者の存在を疑い、傲慢にも権力と名誉において救世主を凌駕しようとする。そして神に対する謀反を正当化するために「自由と平等」を提唱するのである。

しかし、意識と行動を統御する内的規制装置のないところでいかに「自由」を叫んだとしても、それはしよせんグロテスクな放縦であり、自由の幻影以外の何ものでもない。セイトンは自己の権力欲を美化し、天使たちを誤った理由による「革命」へと組織するためにかかる虚偽のイデオロギーを必要としているにすぎず、実際には意識内部の神を喪失し、嫉妬と貪欲によって理性を攪乱された状態にあるのである。このような恣意的「自由」は、後に取り上げる問題とも関連することであるが、一六五〇年代後期、イギリス革命と国際的なプロテスタント運動が急速に悪化していく状況の中で、神を全く考えなくなった喧騒集団ランターズなどの放縦を想起せずにはおかぬ。彼らは外的権威と形式的拘束のいっさいを拒否するという一種のアナーキズムに陥り、ミルトンの考えによれば「王政復古を可能にするのを助けた」⁽³⁾のである。彼らは国王派に敵対する強固な政治集団の組織的戦略戦術と内部規律が最も必要な時に、自己の良心以外にはいかなる権威も認めないという不毛な論議によってそれらのすべてを解体することに努めたのであった。

ミルトンにとって自由とは、道徳律の排除とか恣意性とかを意味するものでは決してない。真の自由は、自分の理性によって神の欲するものが何であるかを知り、神の意志に従って自己を厳しく律する時のみ存在するのである。欲情のカオスの中で暗愚と不規律に陥り、神の法則から逸脱する時には、自分を自分で支配することができなくなり、自然権としての自由を喪失してしまう。

「人間の理性的な魂を正しい限界の中に賢明にも保持したいと思う人は、第一に正しく廉直な自由の及ぶ範囲や領域について自ら完全に知っていなければなりません」⁽⁴⁾とミルトンはいいい、神が結わえたものをほどこような申し出をしてはならない、と戒めている。こ

ここに提示されている「正しい自由の領域」とは、理性が意志に、意志が欲求に指示を与えるという正常な命令系統の中に魂が存在することを意味している。ミルトンは自由を神の法則という限界の中におき、自分の良心、あるいは墮落以後にくもりを生じた人間の道徳的識別力よりも聖書のことばに優越性を認めている。そこで理性は聖書に導かれながら現実の生活過程において神の意志を読みとることを任務とし、それを主体の欲求に適用する内発的な強制力が意志の権限となるのである。

理性↓意志↓欲求という内部ヒエラルキーの最下位にあるべき欲求が、当時「虚妄」の同義語であった「想像力」に刺激されて欲情となり、理性の支配を覆すと、意志は自由なはずの主体の行動過程を統御する力を失ってしまう。その時、欲情は機械的な強制力となるため、魂は「正しい限界」から逸脱した状態に置かれることになる。神に対するセイタンの反逆は、かかる内なるヒエラルキーにおける自己管理の失敗を物語るものでしかない。その結果、世界と自己とを救済する統一的な理念を欠落させたまま、無責任な「自由」を騙り、悪しき政治家たちを想わせる陰謀によって自らの徒党と人間社会を破壊と混乱に導くのである。⁽⁵⁾

考えてもみれば、自己の意識内部における∧神∨を失うこと以上に惨めな状態がほかにあるだろうか。地獄とは何よりも心の中の現象である。神の王国から疎外されたセイタンは、どのような物理的環境にあっても、常に暗黒の奈落の中に閉ざされており、永劫に地獄を引きずっていかないのだ。

……己れの内と周りに彼は

地獄を伴い、場所変わるとも、己れより

逃れ得ないのと同じく、一歩たりとも

地獄より飛び立ち得ない。(IV. 20-3)

理性を支配者とする心的権力構造の政治的表出は神を統括者とする君主政体である。『失楽園』における天国の政府では、貴族的な

階級制度が敷かれており、神は治められる者の同意の有無にかかわらず、天上の政治を総攬している。Wolfe が指摘しているように、神の子が神の代理として天使群の統率者に任命されたとき、天使たちは民主的な普通選挙を通じて自分たちの意志を反映させたわけではないが、歎びの歌をうたい、畏敬の念をもって服従する。というのも神の子は絶対的な為政者にふさわしい完璧な覇者としての資質を備えているからである。彼の支配下にある天使たちの職務の権限も、「座者、王者、権者、力者、能者」(V. 601) というように神へと向かう霊的な完全性の度合に応じている。彼らは精神的な卓越性の序列に依存する階層制の中に位置づけられており、より賢明でより有徳な者の直接的な指示と指揮を仰ぎ、その知的服従に安んじている。⁽⁶⁾

このことは地上の世界にも照応し、人間はすべて生得的に平等ではあるが、その平等は道徳的優劣に基づくヒエラルキーの同一平面上における平等を意味している、とミルトンは考えた。階層制を基礎としないような平等は無秩序と混乱を招くだけだ、というのが彼の見解であり、『自由共和国建設捷徑論』(*The Ready and Easy Way to Establish a Free Commonwealth*, 1660) の中でも制限選挙と終身制寡頭政治が支持されている所以である。

ところがセイトンは、「理性や権利において当然にも平等な者たち——力と輝きにおいて劣るとしても、同等の自由を受ける者の上に誰か君臨しうる者があろうか」(V. 794-7) と高言する。セイトンの罪は価値の階層秩序に反対し、道徳が政治に直結する支配・被支配の関係を否定したところにある。正しいヒエラルキーを無視して、いたずらに「平等」を呼号するのは度し難い虚誕である、といわなければならない。

3 イギリス革命とミルトン

ミルトンは、『教会政治の根拠』(*The Reason of Church Government*, 1642) のような第一次内乱以前のパンフレットでは、祖国を主教の支配から救うことに照準を定め、チャールズ一世への攻撃は控えている。長期議会初期の主流派(長老派議員)やミルトンにとって、スコットランドの長老派、オランダ共和国のカルヴァン主義者、フランスのユグノー主義者などと連帯し、パッキンガム公

(Duke of Buckingham) や大主教ロード (William Laud) などが妨害するプロテスタント運動の国際的な環を形成し、拡げていくことが当面の課題であった。⁽⁷⁾ カトリック恐怖の心理が根強いイギリスにおいては、国王も国民と共にプロテスタントの一大潮流に結集するうねりになるだろう、と当初は期待されていたのである。

だが、フランス人の王妃マリア (Henrietta Maria) はローマ教皇や外国の諸勢力との交渉によって国民の疑惑を招き、そのため議會は国王チャールズに対して不信感を募らせるようになった。チャールズが莫大な私費を投じて高度に審美的な宮廷文化の育成に努めたのは首肯できるとしても、カトリック教徒の王妃を溺愛し、不人気な主教や寵臣に内政を委ねて、宮廷と地方のギャップの拡大を傍観していたのは国事の最高責任者として致命的であった。

ロードは一六二八年以後、英国国教会の統率者となったが、カルヴァン神学の伝統を拒否し、会衆よりも主教を上位に置いてカトリック的方向と見える処置を取ることに、宗教界に決定的な転換点をもたらした。ミルトンは、『宗教改革について』(Of Reformation, 1641)の中で、国家と教会の癒着によるカトリシズムへの逆行の危惧、聖書のことばよりも教会の建物・彫像・儀式に権威を付与する偶像礼拝への批判などの理由で、高位聖職者制度に反対する立場を明らかにしている。

また王政に対してもミルトンの見解は、ニューモデル軍の勝利などに影響されて、一六四九年頃までには、明確に敵対的な方向に固まっていた。『為政者在任論』において、国王は主人や支配者ではなく、国民によって権力を委嘱された国民の代理人にすぎず、為政者として不適格な者からその権限を奪い取るのは国民の自然権であると同時に、神の御心を代行する者の任務である、と彼は述べている。チャールズ及びロードの政治宗教体制が「神の子の摂政」を階層的秩序のもとに擬制的に実現しつつ、利権あさりの魑魅魍魎が跋扈する夢魔的な「反キリストの摂政」を内実としていること、換言すれば、天上の君主制を真にモデルとするのではなく、その否定的な裏返しであるところの世俗的権力構造に基づいて成立し、プロテスタント国際主義の阻害要因となっていること——これがミルトンを初めとする当時の敬虔な清教徒の道義的反逆の可能根拠であった。

彼はこの論文の中で六十人ばかりの残余議員をイギリス国民と同一視し、国民には専制君主を排除する権利と任務があると語って、

きわめて非民主的な国王裁判と処刑を正当化している。実際には残余議會が国民を代表しているなどと強弁できるわけがないのだが、ミルトンは、觀念の中で純化された敬虔な神の僕を国民の理想像として措定しているのである。神の法則を遵守する少数派こそ国民の當為を先取しているのであり、理想像としての抽象的（国民）の権力行使の権限を代行するのは何ら不当ではないと推断する点で、彼は十九世紀初頭のロマン派詩人たちに連なる觀念性ラジカリストであつた。⁽⁸⁾

一六四九年以後のミルトンは、一貫して二つの原則に固執する。一つは君主制の廢絶であり、もう一つは国家による宗教的統制の全廢である。それというのも十七世紀のイギリスが千年王国へと向かう過渡期社会であるという現実認識のもとに、彼は、既述のように、政治および宗教における欲情と傲慢の支配を神の教えに基づく理性と良心の支配に変えるために世俗のヒエラルキーに代わる美德のヒエラルキーの確立を標榜したからであつた。

ミルトンは『イギリス国民のために弁じる第二の書』(*Pro Populo Anglicano Defensio Secunda*, 1654) の中でクロムウェル (Oliver Cromwell) を支持している。その理由は、第一にはクロムウェルがピューリタンの道德律によつて自己の内面を正しく統治できるからであり、第二には彼が思慮、勇氣、雅量、勤勉において他の者に勝っているからである、というものであつた。ミルトンにとつては、政權の座にある者が国民の支持を得ているかどうかということはあまり重要ではなく、それ以上に政治家の道德的な人格、神の法則に合致した政策の遂行能力の有無が問題なのである。

しかし、「古き良き大義」による幻想過程が歴史の基本的な性格を規定した時代はすでに過ぎ去ろうとしていた。国民は長い間の經濟不況と政治的無秩序に倦み、一六五九年から六〇年にかけて、王政への忠誠心と英国国教会への郷愁を呼び起こして、チャールズ二世以外には国家の安定と商業の復興をもたらし得る為政者はいないかのような世論が急速に形成されていく。

五九年十月以後、共和国は軍と議會の無節操と無能のために無政府状態となり、かつて論陣を張った様々なセクトのほとんどの運動家たちも、共和国の崩壊が目前に迫った状況下で絶望や臆病のために沈黙を決め込むようになった。ミルトンは、過去二十年間の戦果が国王派の理論攻勢と大衆の狂氣じみた国王崇拜の熱病の渦の中に埋没し、革命が内部から空中分解していくのを見て拱手できず、国

民の墮落振りと思想の風化に憤慨して、王政復古のわずか二週間前に『自由共和国』の再版を出版する。政局の過酷な変化に対応しようとする彼はできるだけ多くの政治集団や理論家に訴えるために、自分の方針とは根底において一致しない平等派やディガーなどの理論をも包摂し、現実的な可能性を模索したのであるが、その政治的有効性は皆無に等しかった。しかしこの論文は無知蒙昧にみちた状況の中で、いかなる時にも神の教義に固執し、ただひとりでも背教者たちに立ち向かう『失樂園』の中のアブディエルのようなミルトンの勇氣と廉直を立証しているといえよう。

彼は『自由共和国』の中で、地方議會の構想によつて平等派の要求する民主的權利に譲歩しながら、プラトンの『法律』に基づく段階的な制限選挙を一つの軸とし、寡頭制的な終身制中央議會を中枢權力機構として設定している。この中央議會は、有徳の少数者が權力を掌握し、立法権および行政権を持つというもので、一般民衆の行政能力を信用しないミルトンの知的エリート志向が明白に表われている。このような寡頭制が『失樂園』の天国の政治形態にも反映されていることはすでに述べた通りである。Bush がいうように、ミルトンは「多数者ではなく最善の者の支配の信奉者」であり、彼の理想はプラトンの哲人君主とヘブライ的統率者の美德・能力を兼ね備えた政治家による支配であつて、「この世の海における正義の島」の建設であつた。⁽⁹⁾

Hillによれば、ミルトンの政治思想はホッブズ(Thomas Hobbes)のいう國家を内面化したものと、と解釈できる。⁽¹⁰⁾ 周知の通りホッブズは、相争う平等な自然人に対する絶対的な自由は無政府状態を招く、と考へた。そこで人間の自然状態の上に君臨するかのリヴァイアサン(Ⅱ國家)の強権によつて出鱈目で野蛮な自律的個人を統制しなければならない、という理論に帰結する。ミルトンは、この世の絶対的主權にすぎぬホッブズの“Mortal God”すなわち「國家」の止揚をば千年王国後の社會に展望しつつ、國家の權力意志を個人の道徳的意志——個人の内面的な制御裝置に置き換え、自然的人間を超えて支配するかかる規制力を「神の法則」と呼んだのである。

イギリス革命において、「放埒で無拘束な民主主義」(“a licentious and unbridled democracy”)⁽¹¹⁾に反対したミルトンが、ディガーや平等派などの急進的左翼と相いれないのは、まさしくこの点である。ディガーのウィンスタンリー(Gerrard Winstanley)は、富の不等の一掃と土地の共有をテーゼとする一種の原始的共產主義社會の建設に接近しようとした運動家であり、平等派のリルバー

ン (John Lilburne) 、オーバートン (Richard Overton) 、ウォールウィン (William Walwyn) は、普通選挙による議会民主主義の確立を運動綱領とした改革家であつた。ミルトンとは逆に、彼らにとつてたいせつなのは魂の行方とか神の法則ではなく、国民の合意であり、あくまでも世俗的な自由であつた。神権政治を民主政治に変え、貴族的な階層秩序を一掃すること、神の摂理を人民の意志に置き換えること——これこそ平等派が遂行しようとした政治課題であり、同時にこれこそ秩序の中に混沌を持ち込む悪魔的行為として、ミルトンがアリストテレスの『政治学』を援用しつつ反対し、警戒したところのものにはかならない。

彼は民主主義よりも神の選民の自由を政治革命の主要目的として設定し、これを現実化するのには中産階級上層の知識人による寡頭支配体制であると信じていた。そして民衆が「両刃の剣」である自由を誤つて扱い、放縦を意味しながら「自由」を主張するといひ、中産階級下層の出身者が多い平等派やディガーズの民主的な思想に対しては批判的だつた。また下層労働者を基盤とするランターズ、クエーカー教徒、洗礼派など——彼らと思想的に共通する一面がなかったわけではないが——の知性を否定的にしか評価しなかつたのである。

『失樂園』第三卷三三九—三四一行でミルトンは、キリストが一千年に及ぶその支配の後に王笏を捨てること、そして

神がすべてにおいてすべてとなる

God shall be All in All

ことを示唆している。⁽¹⁴⁾ 改めていうまでもなく文学作品が政治理論にそのまま結びつくわけではないが、この小論の冒頭で触れた叙事詩の性格を考え合わせるとき、ミルトンの究極目標の片鱗をここに見出したとしても誤りではあるまい。

彼の構想は次のように集約できるだろう。(1) 十七世紀イギリスの政治に適用すべき現実社会との妥協案が終身制寡頭政治であり、そこに「神の王国」のヒエラルキーを導入する。(2) キリストが地上に再臨し、聖者と共に独裁的君主制の過渡的な王国を建設して、一千

年間にわたり地上を支配する。(3)世界の終末において最後の審判が行われ、千福年の過渡期国家とキリストの王権を含むいっさいの政治的な上部権造が解体し、無階級社会が実現する。換言すれば、(1)有徳の士の貴族制、(2)キリストの君主制を媒介としつつ、(3)最終的に権力の廃棄された段階において、すべての神の民の自己実現を可能にするというものである。従って、(1)におけるミルトンの任務は民主主義の擁護ではなく、原罪の産物ではない民主主義の神話を暴くことであり、理念的現実的な媒介を欠いた平等派の民主主義、ディガーズの萌芽的な社会主義、ランターズの無政府主義などを——国王派に敵対する革命勢力の弱体化を招かないように直接攻撃することは戦術上控えていたが——原則的にはイデオロギー的な偽瞞として退けることであった。

大多数のイギリス国民が、王政支持に傾き、凡俗の反対勢力も、民主主義や社会主義の陥穽に落ち込んだあぐく、沈黙を強いられいているという退廃的なカオスのなかで、ミルトンは、民衆(多数者)の意志ではなく、神の僕(少数派)の意志を地上において徹底させることを強調し、「神の王国」とその死滅という究極状態から、この世のすべてを幻視しようとした。つまり政治的には彼は、本質上、「絶対」を夢見るプロテストタント個人主義者であり、黙示的なヴィジョンからくる神権政治の構築を最大限の到達目標としたのである。

このように考えてみると、原田純氏が『イギリス革命の理念』に収められた「試論ミルトンとイギリス革命」——この労作からは多くの点で啓発されたことを認めなければならないが——の中で、『自由共和国』が「より民衆へと志向する彼(ミルトン)の民主主義的主張の延長線上にある」⁽¹⁵⁾と解釈され、ミルトンを民主主義者、議会主義者として再評価しようとしてされていることに對しては違和感を感じないわけにはいかない。ミルトンが「民衆へと志向」したとすれば、それは理念的に純化された神の選民としての人民衆への観念の上昇過程においてである。彼が現実の民衆に幻滅し、民衆を軽蔑していることは、『自由共和国』の論調のみならず、民衆を「俗衆」(“herd,” PR, III, 49) とし、鳥合の衆(“rabble,” 50)ときめつけた『復樂園』のキリストのことばからも推測できよう。また二十世紀に生きる我々の歴史の後知恵でミルトンの思想の中に「民主主義的主張」——『自由共和国』の折衷案の中にそれが包摂されていることは事実であるが——を読み込んだとしても、ミルトンの真価を認めたことにはならないのではあるまいか。民主主義や議會

主義を価値基軸として彼を評価すること自体が、それらを超えて世界（＝物質的・精神的諸構成）を大改造しようとするいかにもルネサンスの子にふさわしい詩人の遠大なヴィジョンと熱望とをむしろ矮小化してしまうことになるであらう。

再び『失樂園』の寓話とイギリス革命の關係に還るならば、「自由の庇護者を装う」(IV, 957-8) セイタンは、様々な点で国王派を投影しているが、同時にまた改革派内部の負の要因をも暗示しているのである。例えば、国王派と結託して「神の大義」を裏切った長老派、ヒエラルキーの秩序を無視して「平等」を語るリルバーンの一派、野心と私欲のために四分五裂の状態を招いた残余議会の議員や軍士官、熱狂的な道德律廢棄論者の集団ランターズなど——セイタンの資質の一部には、かかる俗悪な政治家と腐敗分子の諸特徴が与えられている。そして更に、革命指導部の迷妄と墮落によって倫理的基盤を失い、チャールズ二世の復位を許してしまったイギリス国民が、セイタンの徒でなかった、とはいえない。

ミルトンは一方においては革命家であり、反逆者であったが、同時にまた一方においては反逆に対する反逆者であり、秩序の擁護者でもあった。この違いを看過すると、イギリス革命の大義と地獄の大義が同じものであり、ミルトンが「悪魔の加担者」であったかのような致命的な誤謬を犯すことになる。一言でいえば、ミルトンは天使アブディエルのような道義的反逆者であった。孤立無援の中で『自由共和国』を出版したミルトンのように、アブディエルは圧倒的に優勢な墮落天使たちの中にあっても彼らに追隨することなく、従順の弱さと神への愛によって逆説的に堅忍不拔の勇氣を示し、詩人の政治革命のエネルギを寓話の中で最も美事に形象化した英雄になっている。謀反へ誘い込もうとするセイタンの意図を完全に打ち砕き、神から榮譽ある稱賛を獲得した天使——神の敵対者に敵対する反逆者こそミルトンが理想とした革命家だったのである。

- (1) John T. Shawcross: "The Higher Wisdom of *The Tenure of Kings and Magistrates*," in *Achievements of the Left Hand: Essays on the Prose of John Milton*, ed. Michael Lieb and John T. Shawcross (The Univ. of Massachusetts Press, 1974), p. 144 參照。

- (2) Northrop Frye: *The Return of Eden: Five Essays on Milton's Epics* (Univ. of Toronto Press, 1965), p. 33.
- (3) Christopher Hill, *Milton and the English Revolution* (Faber and Faber, 1977), p. 244.
- (4) John Milton: *Complete Poems and Major Prose*, ed. Merritt Y. Hughes (The Odyssey Press, 1957), p. 699. *Prose* に註記する。
- (5) S. F. コーネルリッジによれば、ロイヤルソサエティの資格は「リトロードからナボレオンに到る人類の強大な狩人の特徴づけをたて、その著者のなかで、最も良き、最もよく知られた」(“Lecture on Milton and the Paradise Lost,” 1819 in Joseph Anthony Wittreich, Jr. ed.: *The Romantics on Milton* (Western Reserve University, 1970), p. 244.
- (6) Don M. Wolfe: *Milton in the Puritan Revolution* (Thomas Nelson and Sons, 1941), p. 343.
- (7) Hill, p. 166.
- (8) Raymond Williams: *Culture and Society: 1780-1950* (1958; Penguin Books, 1961), p. 51 参照。
- (9) Douglas Bush: *John Milton: A Sketch of His Life and Writings* (1964; Collier Books, 1967), p. 126.
- (10) Hill, p. 267.
- (11) *Prose*, p. 890.
- (12) *Ibid.*, p. 893.
- (13) Shawcross, p. 144 参照。
- (14) Frye, p. 20; Hill, p. 305 参照。
- (15) 原田純『イギリス革命の理念——ミルトン論文集』(小学館、一九七六) 三八三頁。